

カフカ文学とその翻訳：『火夫』・『変身』の例より

野口, 広明
九州産業大学

<https://doi.org/10.15017/16070>

出版情報 : *Comparatio*. 12, pp.115-127, 2008-11-20. Society of Comparative Cultural Studies, Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

カフカ文学とその翻訳

—『火夫』・『変身』の例より—

野口 広明

はじめに

二〇〇八年七月春季学会での翻訳をテーマとするシンポジウムでカフカの初期短編『火夫』を例にとり、主に体験話法の翻訳という観点から報告をおこなったが、本論では『変身』からの翻訳例を考察の対象に加えた。

「体験話法」(Erlebte Rede)という語はドイツ語からの翻訳である。英語とフランス語では「自由間接話法」(Free Indirect Discourse / style indirect libre)、またロシア語では「擬似直接話法」(Искусственно прямая речь)と呼ばれている。演説や、会話での使用例もあるが、ここでは文学技法の場合を問題とする。その場合およそ次のように定義できる。〈語り手の時制と人称のまま、つまり地の文のなかで、地の文のかたちで、登場人物の言葉や思考を伝える技法。〉おのずと語り手と登場人物の声が重なり合い、その結果、登場人物の主観的な考えが、地の文に期待される客観性を帯びてくることがある。登場人物の考え方に偏りや偏見があっても、それが語り手の考えのように読めたり、登場人物

の考えのように読めたりする。翻訳者にとっては、どの程度登場人物の言葉らしく訳すかといった問題が生じてくる。

翻訳者がカフカ文学をどのような枠組みのなかで理解しているかが、翻訳に影響を与えることがある。第二次大戦後に一世を風靡した実存主義思想は、日本のカフカ文学理解にも影響を与え、その影響は翻訳にも及んでいる。

一、『火夫』の場合

『火夫』の粗筋

主人公カールは一六歳である。母国で女中に誘惑され子供ができたため、両親からアメリカへ送られた。ハンブルク・ニューヨーク航路の客船が、ニューヨークの港に入港するところから物語は始まる。船室に雨傘を忘れてきたことに気づいたカールは、知人にトランクの番を頼んで雨傘を取りに戻った。しかし、いつもの通路が閉鎖されていたため、道に迷ってしまう。途方にくれ目の前にあるドアを叩くと、そこは火夫の部屋だった。

火夫はシュバルというルーマニア人上司の待遇に不満を漏らした。カールは船長に訴えるようすすめ、二人は事務室へ乗り込む。そこには船長、高級船員、港湾局の役人らがあり、私服の紳士が船長と話していた。給仕が取り次ぎ会計主任に火夫の用向きを伝えたが、火夫は退出を求められる。そこでカールは居並ぶ人を相手に火夫が不当な扱いを受けていることを訴えた。

船長が話しを聞くこととなり、火夫は書類を出して説明を始め

たが、すぐに混乱して支離滅裂になってしまふ。そこへシューバルがあらわれ、火夫に反論するため、書類に加えて証人を連れてきているという。そのとき、私服の紳士がカールに名前を尋ねた。カール・ロスマンという名を聞くと、その紳士だけでなく船長と周囲の人たちも驚きの表情を浮かべた。それもそのはず、紳士はカールの伯父、上院議員エドワルト・ヤーコプであり、カールがその船で到着することを、カールの子を産んだ女中から手紙で知らされて乗船していたのである。伯父はヨハンナ・ブルマーという女中の手紙をもっており、故郷での経緯をその場の人たちに説明した。カールは、その女中のことを何とも思っていなかったが、誘惑された場面を回想し、伯父に手紙を出してくれたことには感謝した。

カールは立場上、火夫への肩入れを続けることができなくなり、泣いて火夫に別れを告げると、伯父とともにボートで船を離れた。事務室の窓がボートから見えた。シューバルが連れてきた証人たちがこちらに手を振っていた。火夫など最初からいなかったかのようだった。

『火夫』におけるいくつかの翻訳例

例一 カールは無くなったトランクに入っていたヴェローナ・サラミのことを思い出している。原文の *hatte* という非現実話法と時の副詞 *jetzt / now* によって体験話法が識別される。二

(新潮旧) この腸詰があつたら火夫に進呈することができたらう。こういう人たちは、何かちよつとした品を握らせると、手なづけ易いものだ。(二五〇)

(角川) それがあつたら、火夫へ贈呈するために大よろこびで手にとつたことだろう。こんな連中の歓心を買うのはわけないことだからだ。(一六〇一七)

(白水) あのサラミがいま手もとにあるといいのに、とカールは思った。あれがあれば火夫に進呈できる。彼のようなたちの人間は、ちよつとしたものをもらうと、じつに簡単にうちとけてくるものなのだ。(六三)

原文 *Jetzt hätte er aber die Wurst gern bei der Hand gehabt, um sie dem Heizer zu verehren. Denn solche Leute sind leicht gewonnen wenn man ihnen irgendeine Kleinigkeit zusteckt, (...)* (73)

英訳 *But now he would have liked to have the salami at hand, so as to present it to the stoker. For such people were easily won over by the gift of some trifle or other; (...)* (18)

カールの考えたことが体験話法で書かれているが、読み比べると白水版は他の二つの翻訳と違い、言葉を補って人を見下すような言葉を和らげていることがわかる。筆者としては、他の二つの訳の方が原文のニュアンスを伝えていると思う。体験話法の訳という観点からは、白水の「あのサラミがいま手もとにあるといいのに」が最もよくニュアンスを伝えているが、原文にない「とカールは思った」が補われているのは、地の文の訳としてバラン

スを取る配慮と思われる。

例二 次の例は、主人公のパーस्पекティブからの語りであり、狭義の体験話法には含まれないが、論者によっては体験話法とすることがある。三 登場人物の考えが地の文のかたちで語られている。スロヴァキア人について書かれている奇想天外な不安は、一六歳の少年が旧大陸からアメリカへ渡っているという状況を考慮すれば想像できると思う。

(角川) あの前背の低いスロバキアの男が、彼とならんで二つの寝場所の左の方へ寝ていた五晩の間というもの、あいつは自分のトランクを狙ってるな、という疑念を絶えず抱きつづけていたのを彼はいま思いかべた。このスロバキア人は、昼間はいつも長い棒をもつて遊んだり稽古をしたりしていたのだが、もし気がゆるんでカールがちよつとでも居眠りしたら、その棒でトランクを自分の方へ引き上げよう、とそればかり狙っていたわけだ。(一七)

(新潮) 五日間の夜のことを思い出すと、その期間中、カールは自分の左手の二つ先のところに寝ていた小柄なスロヴァキア人のことを、カールのトランクに目をつけているあやしい奴だとずっと注意していた。このスロヴァキア人はカールが弱ってつい一瞬まどろんだら、そのとき、日中いつもそれで遊び、あるいは練習している長い棒でトランクを手元に引きよせようと待ち受けていた。(二〇)

(白水) 二つ先のベッドにいたスロヴァキア人にトランクを盗まれそうな気がして、この五日間というもの、夜つびて見張っていた。そのスロヴァキア人は、カールがつい我慢ならず、うとうとしますのを待ちかまえていた。扱ひ慣れた長い棒でトランクを引きよせるつもりでいたのだ。(六三)

原文 Er erinnerte sich an die fünf Nächte, während derer er einen kleinen Slowacken, der zwei Schlafstellen links von ihm lag, unausgesetzt im Verdacht gehabt hatte, daß er es auf seinen Koffer abgesehen habe. Dieser Slowacke hatte nur darauf gelauert, daß Karl endlich von Schwäche befallen für einen Augenblick einnickte, damit er den Koffer mit einer langen Stange, mit der er immer während des Tages spielte oder übte, zu sich hinüberziehen könne. (74)

英訳 He remembered the five nights during which he had kept a suspicious eye on a little Slovak whose bunk was two places away from him on the left, and who had designs, he was sure, on the box. This Slovak was merely waiting for Karl to be overcome by sleep and doze off for a minute, so that he might manoeuvre the box away with a long, pointed stick which he was always playing or practising with during the day. (19)

「カールが弱って一瞬まどろむのを、このスロヴァキア人は待ちかまえていたのだ。昼の間、遊んだり練習したりしていた長い棒で、カールのトランクを自分の方へ引き寄せることができるように」という記述はカールの不安感がおのずと声を発しているの

であり、根拠のある記述とは受け取りにくい。大きなトランクを長い棒で持ち上げ、隣で寝ている移民の頭越しに手元に引き寄せるといふ場面をイメージすれば、とてもそれが現実的な窃盗の手口とは考えられない。

例三 事務室へ乗り込んだ火夫が、話しているうちに支離滅裂になつた場面である。

(新潮旧) すべては、急ぐように、明らかにするように、正確に言いあらわすように促すのであつた。しかし火夫は何をしたらうか。(二五六)

(角川) みんなは火夫に向かつて、やれ、話を急げだの、それはつきり話をしろだの、正確な言いまわしかたをやってくれだのと警告を発したものだ。だが、当の火夫の方はどうだったろう。

(三四)

(新潮) しかしながら周囲の状況は事を急ぎ、はつきりさせ、まさに正確な描写をすることを要求していた。ところが火夫ときたら何をしていたであらうか?(一六)

(白水) はつきりさせなくてはならず、手っとり早く正確に述べなくてはならない。火夫ときたら、いったい何をしているのだ?(七〇〜七一)

原文 Aber alles mahnte zur Eile, zur Deutlichkeit, zu ganz genauer Darstellung, aber was tat der Heizer? (….) (85)

英訳 But everything demanded haste, clarity, exact statement; and what was the stoker doing? (….) (26)

新潮旧版では、「しかし火夫は何をしたらうか」と、地の文の時制である過去形に対応する訳がなされている。一方、白水版は「火夫ときたら、いったい何をしているのだ?」と同じ箇所をカールの言葉らしく疑問符を付けたまま訳した。つまりこの箇所を体験話法として、すなわちカールの考えとして訳したわけである。新潮版は、疑問符を訳文に残しているが、「何をしていたであらうか」という訳は、地の文の訳である。角川版では、事物や事柄を表す *alles* が「皆」と、つまり *alles* として訳されているように気になるが、問題の箇所は地の文と受け取られている。

例四 次の場面で火夫はすでに意気消沈しているが、カールは闘志に溢れている。そして、奮闘する自分の姿を両親に見てもらいたいという思いが体験話法で表現されている。非現実話法 *Könten* と副詞 *doch* で体験話法が識別できる。

(新潮旧) もちろんカールは自分が力強く気もたしかであると感じた。故郷の家にいるときは、一度もこんな感じをもつたことはなかった。外国に行つて、名士を前にして善のために戦い、勝利には到らなかつたにしても、最後の征服に対して完全な準備をしていたことを両親に見せることができれば、どうであらう。(二五九)

(角川) カールはたしかに自分でも力が充実に頭の冴えた感じがあった。おそらく国にいたときには一度もこんな感じをもつたことはなかった。彼がよその国で有名な人々を前にして善のために戦っているところを、両親が見たらどんなに喜ぶことだろう。

(三五)

(新潮) ところでカールはおそらく故郷の家では一度もそうでなかつたほど力がみなぎり、分別があるのを感じていた。もし彼の両親が、見知らぬ土地で偉い人たちを前にして善というものを擁護し、たとえまだ勝利を得るところまで行っていないにせよ、その準備は完全になされているそんなカールを目にすることができたなら！(一九〜二〇)

(白水) カールは全身に力がみなぎってきたような気がした。しかも冷静だった。家にいたとき、ついぞなかつたことだ。両親に見せたか。遠い異国で、お歴々の前で、善良な人のために闘っているのだ。まだ勝利を収めたわけではないが、必ずや最後には勝利を収めるはずなのだ。(七五)

原文 Karl allerdings fühlte sich so kräftig und bei Verstand, wie er es vielleicht zu Hause niemals gewesen war. Wenn ihn doch seine Eltern sehen könnten, wie er im fremden Land vor angesehenen Persönlichkeiten das Gute verfocht und wenn er es auch noch nicht zum Siege gebracht hatte, so doch zur letzten Eroberung sich vollkommen bereit stellte. (91)

英訳 But Karl himself felt more strong and clear-headed than perhaps he had ever been at home. If only his father and mother could see him now, fighting for justice in a strange land before men of authority, and, though not yet triumphant, dauntlessly resolved to win the final victory! (30)

この例では、新潮版が体験話法らしい訳をしている。英訳が原文にない now を補っているのは、英訳者がこの文を体験話法と理解したということである。

しかしここで重要なのは、「善を擁護し」あるいは「善のために戦い」という部分が引き続きカールの考えであるということだ。つまり作者(語り手)がそのように考えているわけではない。

例五 次の場面は体験話法の例ではないが、『火夫』において最も重要な部分である。すでに「善」という言葉が前の例で現れていたが、この例では「正義」と表現される。火夫は善人であり、シューバルとの闘いは正義を賭けた戦いである。私たちが、このカールの考えに同調できるか否かで、作品世界は全く異なったものとなる。

(新潮旧) (……) もう火夫のことは十分だ、十分すぎると思う。

ここにいる人々は誰も私に賛成だろう」と上院議員が言った。「それが問題ではありません、正義の問題では」とカールは言った。

(二六六)

(角川) 「(……) だが、汽罐士のこととはもうたくさんだ、正直なところ、うんざりしたね。ここにいられる皆さんがたも一人のこらず、きつと私の意見に同感して下さるだろうよ」「でも、公平な裁きの場合には、そんな感情なんか問題になりませんね」そうカールが言った。(五〇〜五一)

(新潮) 「(……) 火夫からはたつぷり、いや、たつぷり以上きか

されたと思うが、どうか。ここに居る皆様も一人残らず私のいうことにきつと賛成して下さることだろう」「でも、それが問題じゃないんです。事柄が正しいかどうかなのです」と、カールは言った。(二七)

(白水)「(…) 話はいまも当人から、十分すぎるほど十分に聞かされた。この点、ほかの皆様も同感なさるだろうよ」「そのことじゃないんです」と、カールは言った。「正義が問題なんです」(八六)

原文 “Ich glaube wir haben von dem Heizer genug und ubergenuge, wozu mir jeder der anwesenden Herren sicher zustimmen wird.”

“Darauf kommt es doch nicht an, bei einer Sache der Gerechtigkeit”, sagte Karl.(103~104)

英訳 “I think we have had enough and more than enough of the stoker, a view in which every gentleman here will certainly concur.”

“But that’s not the point in a question of just,” said Karl.(38~39)

伯父であることが明らかになった私服の紳士に、カールは火夫がこれからどうなるかを尋ねた。引用の最初は、伯父の返事であり、この場の皆が火夫の支離滅裂な訴えに閉口しており、もうたぐさんだと伯父は答えている。カールはそれに対し、支離滅裂であることと、どこに正義があるかは違くと主張する。この主張そのものは正しい。問題はその前提である。正義が火夫の側にあるとカールは確信している。それが『火夫』という作品の大前提で

ある。しかし、それはカールにとつての大前提であり、作者(語り手)がそう語っているのではない。このように『火夫』を読むことは可能であり、このような読みを許容するのがカフカの文学的意図であると筆者は考える。

例六 次の場面は、例五に続く部分であり、乗員議員ヤコブの甥であることが明らかになったカールは、火夫の件で積極的に発言しようとしている。ところが火夫は自分の訴えのことは忘れてしまったかのようなのである。最初の部分は火夫の考えであることが明示されている。下線部は、白水社版だけが明瞭に体験話法として訳している。また、この例では角川版のみが傍点部分を正しく訳しているようだ。

(新潮旧) 身につけている襦袢を見られ、追出されようとも、彼は悩みをすっかり訴えたいのであった。給仕とシューバルは、ここでは階級の一番低いものとして、火夫に最後の好意をつくすであらう。(…)それはそうと、この甥はさつきしばしば彼のために努力してくれた。だからさつきの邂逅のとき火夫の努力に対し十二分の感謝をしたのだった。もつと彼から要求しようという気はなかつた。(二六六)

(角川) ここでは階級が一ばん下のあの二人が、あの給仕とシューバルの御兩人が、いまに自分をおっぼり出すという最後の御親切を見せてくれるだろう、と火夫はひそかに想像していたものだ。(…)そうして、その甥がまた、さつきから何度も火夫の役に立つようにと骨折っているのだが、つまり、自分がどこの誰それと認

めてもらった際に火夫の演じた役割にたいして、だいぶん前から十二分のお礼返しをしたがっているのだ。ところが、かんじんの火夫の方は、そんな彼に一肌ぬいでもらいたいなんて夢にも思っていない。(五一〜五二)

(新潮) 今は身にまとっている二、三枚のボロを見られようと、そこから追い出されようと平気だった。火夫は勝手に、給仕とシユーバルの二人はここで一番身分が低いことから、自分に好意を示すべきだと考えた。(…)この甥はそもそもこれまで何度か彼を助けようとしたので、出会いに際しての彼の尽力に対してはもうずっと以前におかえし以上の感謝がなされていたことになり、火夫はカールからまだ何かを得ようなどとは考えてもみなかった。(二七)

(白水) いまさらシャツのはじっこが見えようとかまわない。追い出したければ追いがいい。給仕とシユーバルは、ここにいる人のなかでいちばん身分が低いことから、せめて二人がこの自分に最後の好意を示すべきではあるまいか。(…)そしてこの甥はいろいろ尽力してくれたのであって、それでもって出会いをお膳立てしたことの礼はすんだも同然であり、自分はこれ以上、何を望んでいるわけでもない。(八六〜八七)

原文 (…)*nun sollte man auch noch die paar Fetzen sehen, die er am Leibe trug und dann sollte man ihn fortragen. Er dachte sich aus, der Diener und Schubal als die zwei hier im Range tiefsten sollten ihm diese letzte Güte erweisen. (…)*Dieser Nefte hatte ihm übrigens vorher öfters zu nützen gesucht und daher für seinen Dienst bei der Wieder-

erkennung längst vorher einen mehr als genügenden Dank abgestattet; dem Heizer fiel gar nicht ein, jetzt noch etwas von ihm zu verlangen.(104~105)

英訳 (…)*now they might as well see the rags that covered his body, and then they could thrust him out. He had decided that the attendant and Schubal, as the two least important men in the room, should do him that last kindness. (…)*The nephew himself had several times tried to help him already and so had more than repaid him beforehand for his services in the recognition scene; it did not even occur to the stoker to ask anything else from him now.(39)

原文で *dem Heizer* 「火夫」となっている部分を白水版のみが「自分は」と訳し、明確に体験話法としてこの部分を読んでいることがわかる。ただし、新潮旧版は主語なし文で訳しており、これも体験話法を日本語に翻訳する場合の一つのかたちではある。

筆者の作品理解

火夫との会話で、アイルランド人、スロヴァキア人などドイツ語圏でない民族についてカールの口から否定的な言及がなされている。火夫はドイツ人であったのでカールは安心する。火夫を不当に扱ったルーミア人上司に義憤を感じ、カールは善と正義のため火夫とともに闘った。読者が、このようなカールに共感するか、逆に批判的な距離を取るかが作品理解の分かれ目となる。『火夫』における体験話法は、異民族に不信感と不安をもつ少年

カールの思考を地の文に溶け込ませている。また同時に、そのようなカールの偏向に読者を同化させたり、批判的な距離をとらせたりする。その働きは両義的である。白水社版では、他の翻訳より体験話法が明確に翻訳され、カフカが作品に与えたコントラストが、より正確に写し取られている。

二、『変身』の場合

『変身』の粗筋

朝、胸苦しい夢から目をさますと、グレーゴル・ザムザは、ベッドの中で一匹の虫に姿を変えてしまっていた。グレーゴルはセールスマンで旅また旅の生活だった。グレーゴルを氣遣って家族が声をかけてきたが、返事をする自分の声を聞いて驚いた。自分の声にピーツという切ない音がまじっていたのである。

門口のベルが鳴った。専務じきじきのお出まじだった。両親は一生懸命に弁解し、反対側の部屋では妹がしくしく泣き出した。グレーゴルも必死で弁解したが、すでに人の声ではなかった。グレーゴルはやつとのことのでアを開いた。専務は叫び、母はすわりこんでしまった。父は両手で目を覆って泣き出した。

グレーゴルの虫としての暮らしが始まった。妹がミルクに白パンのかけらを浮かした皿を部屋に置いてくれた。しかし、好物だったミルクはおいしく感じられず、腐りかけたものはおいしかった。

グレーゴルは昔を思い出した。セールスマンとなって金を稼ぎ、

家でテーブルの上にさしだして家族を驚喜させたこと。ヴァイオリンの好きな妹を音楽学校に入れる計画をクリスマス・イヴに家族に発表するつもりであったことなど。

やがて、食事を運んでくる妹のふるまいが、グレーゴルに恐怖を感じさせるようになる。部屋に入ると一目散に窓に向かってかけてゆく。そしてどんなに寒くても、窓を開けたまま深呼吸をするのだ。あるときグレーゴルが直立不動の姿勢で壁に寄りかかり、窓の外を眺めていたとき、早めに現れた妹と鉢合わせになった。妹ははじかれたように後ずさりして逃げ去った。

母に会いたいというグレーゴルの願いが実現した。妹の提案で必要の無い家具をグレーゴルの部屋から運び出すことになったのだ。グレーゴルのいつもの、シーツをかぶせたソファの下に身を隠していた。母親は、いつかグレーゴルが帰ってくる時、部屋がもとのままでないといけないと主張したが、妹はソファ一つを残してすべての家具を運び出すべきだと言ってきた。グレーゴルもなんとか机だけは、また壁にかけた、雑誌から切り抜いた女性の写真だけは守ろうとして、ソファの下から這い出し写真を隠すように壁に張り付いた。そこへ戻ってきた二人と鉢合わせになり、母親は氣を失ってしまふ。母親を氣遣ったグレーゴルが部屋から出たところに父親が帰宅した。父親は自宅のありさまを見て激怒し、グレーゴルにリンゴを投げた。そのうちの一個がグレーゴルの背中に食い込んだ。

上のシーンで父親は金ボタンに飾られた身体にびったりの紺の制服を着ていた。働きに出ていたのである。妹も働き始めた。

また、住まいの一部を三人の間借人に貸した。今度はグレイゴル
の部屋が、家中のがらくたの置き場となった。グレイゴルはもう
ほとんど何も食べなくなった。

ある晩のこと、最近聞いたことのなかったヴァイオリンの音が
聞こえてきた。間借り人たちの頼みで妹が弾いているのだ。間借
人たちには演奏が気に入らないようだが、グレイゴルは妹の演奏
に感動した。そして、皆のいる居間に入っていった。

グレイゴルは間借人に発見され、家族は詰問された。家賃を払
う義務もないと三人は言い始めた。このとき妹が、もうこれ以上
は無理だ、このばけものを振り捨てるしかないと言おう。この
ばけものがグレイゴルだと思ふ気持ちを捨て去らなくてはな
らないと。グレイゴルは部屋へ引き返した。翌朝、手伝いのばあ
さんが部屋をのぞいたときグレイゴルはもう死んでいた。

この何ヶ月かためしなかったことだが、三人は出かけて電車
にのり郊外の行楽地に向かった。三人しか乗りあわせていない車
内には、暖かい日の光がすみずみまで満ち溢れていた。のんびり
とくつろいで座席の背にもたれ、三人は今後の生活の見通しにつ
いて話し合った。電車が目的地につくと、娘が一番に席を立ち、
のびのびと若い身体を伸ばした。

『変身』の翻訳例

グレイゴルが妹のヴァイオリンに感動した場面である。こ
の後、グレイゴルは部屋を出て妹のところへ行こうとし、居

間にいる家族と間借り人に姿を見せてしまう。そして妹の死
刑宣告ともいえる言葉が発される。

(新潮旧)だがしかし妹は実に美しく弾いていた。顔を片方にか
たむけ、眼は吟味するが如く物悲しく楽譜の行を追っている。グ
レゴールは更に少々にじりだ。そして床にびつたりと、ついてし
まふほど頭を低く下げた。できることなら妹の視線を捉えようと
いうのである。音楽にこれほど魅了されても、彼はまだ動物なの
であろうか。(九七〇九八)

(新潮)だがそれにしても、妹は大変見事にひいたのだ。顔はつ
と脇へかしげられ、眼はもの悲しげに、たしかめるように、
楽譜を行また行とたどっていた。グレイゴルはさらに
少し前進し、首をびたりと床に着け、何とか妹と眼を見か
わそうとした。これほど音楽の力に捉えられるとは、やはり彼は
動物なのか?(八五)

(白水)だが、妹はとても上手に弾いていたのだ。顔をわきに傾
け、たしかめるように、悲しげに、目が楽譜を追っていく。グレ
ゴールはまた少し前へ乗り出し、妹の眼差しに出くわすように、
顔をびつたり床につけた。獣だからこそ、それで音楽がこんなに
身にしみるのか?(一四四)

(光文社古典新訳文庫)だがそれにしても妹の演奏はすばらしい。
首をかしげて顔を横にむけ、悲しそうな目でチェックするように
楽譜を順に追っている。グレゴールはもうすこし這って前に出て、
頭を床すれすれまで低くした。うまくすると妹と目を合わせるこ
とができるかもしれない。こんなにまで音楽に心をつかまえられ

るとは、やはり動物なのだろうか。(一一二)

原文 Und doch spielte die Schwester so schön. Ihr Gesicht war zur Seite geneigt, prüfend und traurig folgten ihre Blicke vorwärts und hielt den Kopf eng an den Boden, um möglicherweise ihren Blicken begegnen zu können. *War er ein Tier, da ihm Musik so ergreift?* (185)

英訳 And yet Gregor's sister was playing so beautifully. Her face leaned sideways, intently and sadly her eyes followed the notes of music. Gregor crawled a little farther forward and lowered the his head to the ground so that it might be possible for his eyes to meet hers. *Was he an animal, when music had such an effect upon him?* (53)

「War er ein Tier (...) ?」(Was he an animal (...) ?)の部分は、グレゴールが、「Bin ich ein Tier?」と自らに問うた言葉であり、それを地の文として過去形と第三人称で語ったものである。すなわち体験話法であるが、白水版では獣であることが音楽に感動する理由とされている。つまり獣であることに積極的な意味が与えられているのである。その他の訳では、動物のかたちはしているが、感じ方は人間のグレゴールのままなのだというふうに理解している。

筆者の作品理解

主人公グレーゴルの人生を、私たちは作品を読み進む間、グレ

ーゴルと共に生きている。しかしカフカは、他者の視線に晒されるグレーゴルの姿も示している。妹グレーテの言葉は直截である。「もうこれ以上は無理。このばけものを振り捨てるしかないわ」。物語はグレーテが「のびのびと若い身体を伸ばす」しぐさと、ザムザ夫妻がその姿を喜ばしげに眺める場面で終わる。

グレーゴルの部屋に入るとグレーテが、どんなに寒くても窓を開けて深呼吸をするというシーンがあった。グレーゴルは、腐りかけたものを好んで食べるようになっていたので、数週間の間に部屋は異臭に満たされただろう。作品で直接にそのことが語られているわけではない。しかしそれが暗示されたグレーテの行動であることは容易に理解できる。私たちはグレーテとともにその異臭のなかに歩み入るのでなく、グレーゴルとともにソファアの下から、窓へ駆け寄るグレーテを覗き見ていたはずである。グレーテは、分厚くグレーゴルで満たされた世界の外なる視点を喚起する。

おわりに

『火夫』と『変身』において体験話法は主人公のパースペクティブからの語りともに、主人公の観点から世界を描き出す。しかし別の世界が、体験話法と主人公のパースペクティブで描かれた世界の隙間から垣間見られるのである。その意味で白水社版『変身』は主人公に寄り添いすぎている部分があると言わざるを得ない。

翻訳者のカフカ文学との関係の一つの例が、新潮文庫『城』のあとがきに見出される。「いつまでたっても城とその村に所属することをゆるされない測量師Kの生涯は、生れながらの異邦人カフカの縮図であった」(五一三)。ここでは小説の主人公Kが作者カフカと重ね合わされ、翻訳者の共感を得ている。だが、主人公がそもそも測量師であるかどうか疑わしいと、ヴァルター・ベンヤミンは語っていた。^四 新潮文庫『城』のあとがきには、カフカの伝記と諸作品への言及もあり、『変身』に関しては次のように論評されている。「グレーゴルは、家庭の善良な息子であり、社会の模範的な市民であつたが、このことは、彼の存在が家族のため、社会のための存在であり、自己自身のための存在でなかつたということ、『自己自身に関係するところの関係』であるべき彼の自己が自己以外のものに関係するところの關係に墮してしまつていたということ、自己の本来性から「世間の人」(ダスマン)の世界へ類落(タイラク)してしまつていたということにほかならない。自己の本来性を放棄することで「世界」の模範的な市民でありえていたグレーゴルは、この類落に気づいたのだ」(五一四)。

ここでも虫となつたグレーゴルは「類落」に気づいた者として称揚されており、白水版との共通性が見出される。翻訳者はただ語学的に訳しているだけでなく、一定のカフカ文学理解や文学観をもち、それが翻訳に反映することがある。

問題(鈴木康志『体験話法』一五〇)という指摘がなされており、カフカ研究と翻訳の側でもより意識的にこの問題に取り組む必要がある。^五

テキストとしては以下のものを用いた。

Franz Kafka: *Drucke zu Lebzeiten*. S. Fischer. 1994.

英訳

Franz Kafka: *America*. Penguin Books. 1967.

Metamorphosis and Other Stories. Penguin Books. 1961.

翻訳

カフカ全集Ⅱ『審判・アメリカ』原田義人 渡邊格司 石中象治 訳 新潮社 一九五三。

決定版カフカ全集4 『アメリカ』千野栄一 訳 新潮社 一九九二。

決定版カフカ全集1 『変身・流刑地にて』川村二郎 円子秀平 訳 新潮社 一九九二。

カフカ小説全集4 『変身ほか』池内紀 訳 白水社 二〇〇一

フランツ・カフカ『アメリカ』中井正文 訳 角川文庫 一九七二。

フランツ・カフカ『変身』高橋義孝 訳 新潮文庫 一九五二。

フランツ・カフカ『城』前田敬作 訳 新潮文庫 一九七一。

フランツ・カフカ『変身/掟の前』他2編』丘沢静也 訳

注

一 Der Heizer『火夫』はカフカの死後に出版された長編小説 Der Verschollene『失踪者』の第一章となっている。『火夫』では一六歳、『失踪者』では一七歳と本文批判版でもカールの年齢が一致していない。

二 体験話法の識別については『体験話法』鈴木康志 大学書林二〇〇五、「IV 体験話法の識別法」一〇五頁以下に詳しい。また、一般的に体験話法をどのように訳すかという問題については、鈴木康志「ドイツ語体験話法の訳し方―時称・人称の変換操作―」『外国語教育論集』（筑波大学外国語センター）第9号一九八七を参照のこと。

三 鈴木康志の前掲書『体験話法』のIII 体験話法の形態（人称と時称の変換）四三頁に次のような記述がある。「Banfieldの場合、彼女の自由間接話法の概念は私たちの体験話法のそれより広いもので、Stanzelの「映し手の叙法」つまり作中人物の視点からの語りに近いものといえます」。鈴木氏はBanfieldの著作を研究史上重要と思われる文献としている。

「Banfield, Ann (1982): Unspeakable sentences. Narration and representation in the language of fiction. Boston, London, Melbourne

and Heneley (Routledge & Kegan Paul) [小説の思考再現部（自由間接話法など）を「語り手（話し手）のいない文」とした革新的なモノグラフィ―」（同上 一九四頁）」

四 カフカの死後一〇年に際して書かれたベンヤミンの随筆に次のような一節がある。「城山の麓に横たわる村を見よう。この城からKの騙る測量師としての招聘なるものが、かくも謎のようにそして思いがけなく認められるのだ」。(Zur zehnten Wiederkehr seines Todestages. in Benjamin über Kafka. suhrkamp taschenbuch wissenschaft, 1981. S.24) ベンヤミンは「Kの騙る」と訳した部分で vorgeblich 「偽りの、見せかけの、自称の」を用いている。

原文 Betrachten wir das Dorf, das am Fuße des Schloßbergs liegt, von dem aus K's vorgebliche Berufung als Landvermesser so rätselhaft und unerwartet bestätigt wird.

五 カフカ文学について体験話法という観点から論じた文献には次のようなものがある。保坂宗重 Die erlebte Rede in "Die Verwandlung" von F. Kafka 『ドイツ文学』（日本独文学会）第四一号三九〜四七 一九六八年。(Seiji Hujihira) 藤平誠二 Erzählhaltung und Erlebte Rede in Kafkas "Der Bau". 『茨城大学教養部紀要』第八号三〇七〜三一八 一九七六年。

フランス文学の立場からであり、カフカについて論じているわけではないが重要と思える論文もある。中山真彦『物語テキスト

における「視点」の意味―フランス語の場合・日本語の場合―
『人文論叢』（東京工業大学）第一六号四一―五四 一九九〇年。
中山氏は、登場人物の視点からの語りと自由間接話法（体験話法
のフランス語での表現）について、「じつは両者は根は一つであ
り、ともに伝統的小説構造の批判と解体にかかわる」（四七）とし
ている。具体的にいえば、自由間接話法は「主体としての語り手
と客体としての作中人物を立てる二元論を解体しようとするの
である」（四八）という。カフカ文学にも応用できる指摘である。

（本稿は二〇〇八年七月五日の日本比較文学会創立六〇周年記
念九州大会（九州大学）におけるシンポジウム「文学の翻訳をめ
ぐって」の発表原稿に加筆訂正を施したものである）